

## 開会挨拶 済生会理事長 炭谷茂氏

今日はお休みのところ、また大変お足元の悪いところ、このようにたくさんの方が生活困窮者問題シンポジウムにご参加いただきまして、心から感謝申し上げます。

今回取り上げました生活困窮者問題につきましては、ご案内のとおり、いま日本の社会は子どもの貧困を巡って大きな社会問題になっていると思っております。いまや6人に1人の子どもは貧困の家庭に育っているということです。なかんずく一人親の家庭においては、50%以上が貧困の家庭になっているということが統計上明らかになっているわけでございます。これは日本の社会が、所得格差がだんだん出てきたことが最大の原因だと思います。貧困の家庭に育つ子どもは、将来再び貧困に陥ってしまう。いわば貧困の承継というのが、いまの日本の社会の中期的にも大きな問題になっていくという心配があります。

昨年度、東京の足立区が、貧困家庭の子どもと一般の家庭との比較という大変立派な調査をされました。大変注目すべき調査だと思います。この調査で明らかになったのは、貧困の家庭の子どもは健康状態もよくない。生活習慣上もよくない。わかりやすい例で言えば、虫歯が多いとか、麻疹などの予防接種をしていない。いろいろな面でこのようなことが明らかになっています。

また大規模な調査がお茶の水女子大学の研究グループによってなされています。これはインターネットで調査結果が詳細に公開されていますのでアクセスできますが、この調査を見ても、所得と全国学力テストの正答率が完全なる相関関係にあるということがあきらかになっています。そうだとすれば、貧困の子どもは将来、健康面、生活面、また学力面で大きなハンディキャップを背負って社会に出ていく。したがって貧困の承継が起こってしまうということになるわけです。

以前であれば、貧困の家庭はかなり多かったのだろーと思っております。しかし、歯を食いしばって学校の勉強をしながら、自分で勉強したり、いろいろな機会で自分の実力を磨いていった。そういうような人は50年前であればかなり多かったのだと思っておりますが、いまはそのようなことはなかなか当てはまらない。低学年のうちに差が開いてしまう。これが日本の社会の偽らざる現実です。この悪循環といいますか、この関係をどこかで断ち切らなければいけません。

われわれ済生会は社会福祉法人としていろいろな使命を持っていますけれども、一番重

要な使命の一つは、生活困窮者への支援ということを第 1 のミッションに掲げています。明治 44 年に済生会は明治天皇によってつくられましたけれども、単なる病院をつくるためにわれわれができたわけではありません。当時、医療サービスや福祉サービスに恵まれない人、受けられない人に対して、何らかの支援をしなければいけないということで済生会が立ち上がりました。

当時といまでは大きな差があることは言うまでもありません。しかし、明治時代の生活困窮者の問題といまの生活困窮者の問題を比べると、量的にはむしろ増大している。問題はむしろ解決が難しくなっている。そういうような状況です。したがってわれわれ済生会のミッションは、このような生活困窮者への支援ということであるならば、その中の一つの問題である子どものいる家庭の貧困、子どもの貧困問題を何らかのかたちで関心を持って、解決のために貢献しなければいけないということで今回のシンポジウムを開いたわけです。

幸い、今回のシンポジウムについては、当栃木県で子どもの貧困問題について長年研究、もしくは調査、仕事とされている方々、大変立派な方々に講師なりシンポジストとしてご参加いただきました。ご多忙のところお引き受けいただき、心から感謝申し上げます。また、今回のシンポジウムは、われわれ済生会の本部とともに、地元の済生会宇都宮病院との共催というかたちで実施しています。このシンポジウムにあたりましては、社会福祉法人栃木県社会福祉協議会、社会福祉法人宇都宮市社会福祉協議会など、地元の福祉関係者の団体のご後援をいただいております。厚く感謝申し上げます。

今回のシンポジウムが子どもの貧困問題に解決につながるような何かを得られれば、子どもとしては大変幸せです。そのようなことを期待しまして、私のご挨拶とさせていただきます。